

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス／作 小尾英佐／訳

(早川書房)

嶋田英敬



本書はSF小説にジャンル分けされていますが、SFらしからぬシンプルながらも心に残る感動的なストーリーが広く共感を呼び起こす名作です。それゆえ多くの読者が「チャーリー（主人公）は私だ」という感想を持つと言います。

物語は、手術によって知能が急速に向上し、その後急速に衰えていく主人公、チャーリー・ゴードンの視点から綴られます。彼は術後数か月のうちに天才的な知性を手に入れます。それは手術を行った医師たちをも遥かに凌駕するものでした。しかし、その一方で彼の心はその変化に追いつけず、周囲との軋轢や心理的葛藤に直面します。チャーリーは最終的には知性を失ってしまいますが、自分の分身とも言うべきネズミのアルジャーノンのことは忘れませんでした。その描写は、もの悲しくもなぜかほっとさせられるという複雑な感情を呼び起こします。

哲学者カントは、人間の心には「知情意（知性・感情・意思）」の3つの働きがあると云いましたが、このストーリーには、これらのバランスの大切さを否応なく深く考えさせられます。チャーリーの劇的な変化の物語を通して、知性だけではなく感情や意思も大切で、バランスが取れた人間性が求められるということ学ぶことができます。特に自己成長の真ただ中にいる中高生には、知情意のバランスの大事さを学び、人格形成や人間性を高めることに繋げる良い機会を提供する本だと言えるでしょう。知情意のバランスが崩れてゆく主人公の姿に自らを投影し、あたかも窓の外から眺めているかのような読書体験は、子供たちが様々な思索を深める一助になると思います。

私がこの小説を初めて読んだのは、もう30年以上前のことです。今回、再読してストーリーはもちろん、読後の複雑な感情までもが鮮やかに蘇ったことは自分でも驚きでした。あの頃に学んだ人間の心理や道徳的な視点が、自らの感性や理性として血肉になっていることを実感できました。

知性を失う恐怖におびえながらチャーリーは言いました。「人間的な愛情の裏打ちのない知能や教育なんてなんの値打ちもない」と。そのことを学ぶためにも、子供たちに一読を勧めたい作品と言えます。



(医療法人社団如-water会 嶋田病院・嘉島クリニック理事長)

2024年 1月20日 (土) 特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 発行

<https://www.kodomonohon.org> E-mail: info@kodomonohon.org

新年のご挨拶

特定非営利活動法人熊本子どもの本の研究会

理事長 横田 真



2024年は、能登半島地震という波乱の幕開けとなりました。熊本地震の経験者として、早期に余震が収まり、被災地の方々の生活再建の取り組みが進むことを祈っております。

2023年は、研究会にとって創立40周年にあたる年でした。コロナ禍が沈静化し、40周年記念事業も含めて、イベントをほぼ予定通りに開催することができたことは、私たちにとても大きな喜びでした。



9月10日に開催した40周年記念公開講座では、翻訳家のさくまゆみこさんをお招きし、「子どもの本は世界につながる窓」をテーマにお話いただきました。子ども達が、他の国の子どもの本を読むことを通して世界の人々の多様性を知り、理解することが世界平和につながるというメッセージは、国際情勢が激変する中にある私達にとって、強く心に響くものでありました。

定例講座は、講師のご都合で9月の内容が変更になりましたが、開講講座から予定通り毎月

開催することができました。3月の閉講講座を含めた残り2回も楽しみます。子どもと大人の

読書会(オンライン)は5月、9月、12月の3回開催しました。3月に4回目を開催する予定です。グリム童話の魅力(オンライン)は8月に「灰かぶり(シンデレラ)」を対象に第1回を開催しました。2月開催の第2回では「赤ずきん」を取り上げます。コロナ禍の沈静化に伴いおはなしボランティアへの要請が随分増えました。12月までに18回実施しています。3月までに少なくとも2回は実施予定です。

2022年のふるさとくまもと応援寄付金(熊本県)による支援は、40周年記念公開講座の活動に充当させていただきました。23年は前年以上のご支援をいただいております。24年度事業に活用させていただきます。24年は春に安藤忠雄さん設計の「こども本の森 熊本」が開館することをきっかけに、子どもの本に対する関心が高まる年になることが期待されます。研究会としても、講座等によって大人が学ぶとともに、おはなしボランティアや読書会、更にはびわの木文庫の活用を通して、子ども達との接点を増やせればと思っております。

本年も宜しくお願い申し上げます。



◆講座報告「絵本の動物が服を纏うこと」

- ・日時 11月15日(水) 10時~12時
- ・会場 熊本市立図書館集会所
- ・参加者 8名
- ・担当 有久 賢治



■世界の寓話(イソップ・ペローの昔話)

絵本の中の動物が服を着る(纏う)というテーマが見過ごされてきたのではと考え、古典まで遡ってみたが、明確な事例は見つからなかった。起源が紀元前6世紀に遡るイソップ寓話は、それをもとにしたのちの時代の絵本の動物がすべて服を着ている訳ではない。17世紀にペローがまとめ、2世紀を経て画家ギユスターヴ・ドレが版画を添えた『ペローの昔ばなし』(白水社)の「赤ずきん」のオオカミの被るナイトキヤップや「長靴をはいた猫」の帽子、革靴の描写は精緻である。平安・鎌倉時代に描かれた墨絵の絵巻物「鳥獣戯画」の猿、兎、鹿、蛙が遊ぶ姿は、猿の袈裟、兎の烏帽子等、姿態や背景も丹念である。人間と動物の共存を感じるイソップ寓話は、宣教師によって16世紀末、日本(天草)に伝えられ、ローマ字本が印刷されたのに続き、江戸時代には漢字仮名まじりの文語体活字本が印刷され、読み継がれてきた。

＊参考文献『ESOPPO イソップの生涯の物語 天草本伊曾保物語より』（熊日出版）

■グリム、アンデルセン童話と各国の昔話

19世紀以降数多く出版されたグリムやアンデルセン童話の絵本には着衣動物が見られる。

『おおかみと七ひきのこやぎ』（福音館書店：フェリクス・ホフマン絵）の母親はエプロンを、

『ブレーメンのおんがくたい』（福音館書店：ハンス・フィッシャー絵）のおんどりはラッパ

を持ち、最後は前掛けをそれぞれつけている。

アンデルセン童話を踏まえたエルサ・ベスコフ作の『おやゆびひめ』（フェリシモ出版：エル

サ・ベスコフ絵）のモグラ、ツバメは素裸で、英国の昔話の『三びきのこぶた』（福音館書店：山田三郎絵）も素裸に肩提げ袋である。ロシア

の昔話『もりのともだち』（富山房：マーシャ・ブラウン絵）、『ひつじかいとうさぎ』（福音館

書店：スズキコージ絵）は素裸だが、『マーシヤとくま』『てぶくろ』（ともに福音館書店：ラ

チョフ絵）ではロシアの民族衣装を着ている。

■児童文学と絵本の2作品と服装

○『不思議の国のアリス』の盛装したうさぎ

オックスフォード大学の数学教師だったルイス・キャロルが同僚の娘アリスに贈った手作



り本が、画家ジョン・テニエルの挿絵入りで出版されてベストセラーとなった。日本では生野

幸吉訳（福音館書店）等がある。19世紀の英国の服装は個人の趣味でなく、階級や格式を表した。ジャケットにチョッキと懐中時計のうさぎ

の登場で幅広い人気を得る要因となった。

＊参考文献『おとぎの国のモード』坂井妙子著

○『ピーターラビットのおはなし』と服装

作者ビアトリクス・ポターはロンドンの裕福な弁護士の子と生まれる。家庭教師に学び、

同年代の子とは遊べず、弟と絵を描いて過ごすことが多かった。父の友人のラファエル前派の

画家ジョン・エヴァレット・ミレイと交流があった。ペットのうさぎにピーターと名付け、元

家庭教師の子への見舞いに描いた絵手紙のプレゼントから、『ピーターラビット』は生まれ

た。生き生きとつづられるうさぎの物語は、瞬間に人気を博した。今回気付いた点は、小さい頃

頃から動物を飼って写生や解剖をしていたため、骨格まで熟知し、服を着ていても自然の

振る舞いに見えること。また絵本の表紙、見返しは服を着ているが、本文前頁の挿絵は木の根

の巣穴前の裸のうさぎ母子が描かれていて、話の展開を予感させる。「ピーターに理想の幼年

時代を託した」との作者の思いが、作品の普遍性の要因だろう。

＊参考文献『素顔のビアトリクス・ポター』（エリザベス・バカン著）

■日本の動物絵本から

服を着た動物絵本で人気の『ぐりとぐら』（福音館書店）や「14ひきのシリーズ」（童心社）、

精緻な素裸の絵の『どうぶつのおやこ』（福音館書店）などが有名だが、教科書に掲載された

ことのある次の2作品を取上げる。

『ともだちや』内田麟太郎作／降矢なな絵（偕成社） Ⅱ主人公のキツネが「友だちになり

ます」とチンドン屋風の服で触れ回り100円の対価で友だちになるが、真の友だちになりた

いオオカミから「お金を貰うのか」と問われ、真理に気付く▽『あらしのよるに』きむらゆう

いち作／あべ弘士絵（講談社） Ⅱオオカミ（ガブ）とヤギ（メイ）は原野で食うか食われるかの

関係で当然服は着てない。嵐に避難した小屋の暗闇で正体が分からず、会話するうちに打ち解

け、友として再会を約束。2作品とも動物が主人公で、子どもたちに人としてどうあるべきかを考

えらるうえで、良い視座となる絵本であろう。＊今回、服を着た動物絵本がなぜあるのかを見

てきたが、結論は難しい。昔は教訓や知恵を伝えたが、近代では諷刺や擬人化のために服を着せた。現代は直接言いにくいことを動物に語らせていると思われる。

〈参加者の感想〉



(報告 有久賢治)
* * *

子どもたちは動物が好きで親しみを感じると思う。おはなし会の導入でもウサギやクマなどの人形を使う▼『おおかみと七ひきのこやぎ』でお母さんヤギだけ服を着ているが、女性を表す時に服を着せるのかなと感じた▼歴史も振り返っているが、文字の時代の物語に、のちに絵を付けたものもあり、比較検証が難しい。現代の絵本に絞ってテーマを深める方法が分かりやすかったのではと思った▼「野生は服を着ない、擬人化は服を着る」という結論に納得▼「鳥獣戯画」の絵本や美術展図録は面白く見応えがあった▼わが家で服を着た動物の絵本といえば『14ひきのあさごはん』。子どもは動物が好きで、ストーリーは日常的なことだから服を着ていたんだなと思った▼一番に思い浮かんだのは『ピーターラビットのおはなし』。あらためて本を手に取り、動物が精密に正確に描かれているからこそ服を着ている姿も違和感がないのだと思った。ピーターの青い

ジャケットはストーリーで重要なアイテム▼『どうぶつのおやこ』など動物の生態を描いた画家の藪内正幸さんは動物の骨格まで調べるとおっしゃっていた▼「鳥獣戯画」を見て日本は動物も人間も一緒というような感覚があるのではと思った。日本は動物を神の使いとして捉えている側面も持つ。

*今回レポーターの有久さんが所蔵の貴重で珍しい絵本や資料をたくさん持ってこられた。「絵本の動物が服を纏う」というテーマ設定により、絵本の魅力や奥深さを見る新たな視点を与えられたと思った。(報告 木村一恵)

◆講座報告

子どもの本とは？②大人の本と比較して

日時 12月20日(水) 10時〜12時

会場 熊本市立図書館集会所

参加人数 8人

課題本 森鷗外作『高瀬舟』

担当 古家直美(当日は欠席。資料を基に堀畑真紀子が議事進行)

○『高瀬舟』を選んだ理由 森鷗外の作品の中で言葉にならない読後感が一番強かったため。

○『高瀬舟』の主題は「高瀬舟縁起」(鷗外本

人による『高瀬舟』の解説文から考えると以下の2点。

1、財産の多さと欲望の関係性から「足るを知る」とはどういうことか。この言葉は老子「知足者富」(足るを知る者は富む)による。

護送役人・羽田庄兵衛は、安定した職業に就き、妻の実家も裕福だったためお金に不自由はないが、高瀬舟で罪人を護送する仕事を不快な職務として不満に思っていた。一方、喜助は幼い頃両親を亡くし貧しい家庭で育ち、まとまったお金を持つことがなかった。島流しとなり少しのお金をお金けでもらい、お足を自分のものとして持っているのは初めてだと幸せに満ち溢れている。* * *



2、「安楽死」の是非 * * *
背景に鷗外自身の経験がある。1908年に弟の篤次郎が喉に血膿が詰まって窒息死し、次男不律も百日咳で亡くなる。そして同時期、長女茉莉が百日咳に罹患し、茉莉をモルヒネ注射で安楽死させかける出来事が起こる。弟や次男が苦しみながら亡くなったことが、茉莉に対する安楽死実行の考えに発展したのではないか。作品では、不治の病に苦しみ、死を願う弟を救うために殺したことが、重罪に値する殺しな

のかが提起されている。(報告 古塚直美)

【補足説明】『高瀬舟』の論点の一つに、庄兵衛の「オオトリテエに従うほかない」という立場、疑問を持ちながら權威に判断を任せるという姿勢が挙げられる。ここには、お上の処断、即ち權威にやすやすと従って良いかという反語が秘められている。「オオトリテエ」とフランス語を用いることで、「權威」という語に当時の幕府の権力を超えた普遍的イメージを与えようとしている。(報告 堀畑真紀子)

【読后感想】「高瀬舟縁起」を知り理解が進んだ▼喜助がお情けでもらったわずかなお金に満足している状態を見て、庄兵衛は彼に「知足」を感じる。しかし「知足」は庄兵衛の主観であり、喜助自身がその境地にいるかは不明▼庄兵衛の日頃の思いや不満が喜助をきっかけとして吐露された▼權威者であった鷗外の不安・ぼやきを感じ▼島流しの刑は喜助に可能性を提示▼映像が想い浮かぶ描写▼眼前のことを受け入れていく喜助の姿勢に「知足」を感じ▼「安楽死」「知足」について考えるきっかけとなった▼介護の経験からは、人間の生への執着を感じる▼一文に漢詩・心情・余韻・美を包含する高度な技法▼印象に残る内容と名文に触れる

ことができた

【子どもの本との違い】喜助や庄兵衛の複雑な感情を子どもが感取するのは難しい▼子どもの本は最後に教訓が示される▼昔話の主人公の性格は単純で、強く生きていくものだというメッセージあり▼小説は高度な描写を用いる(報告 堀畑真紀子)

報告 第6回「子どもと大人の読書会」

・日時 12月24日10時～12時

・場所 オンライン会合(ZOOM)

・参加者 11人(小学4年生3人/中学2年生3人/大人5人)

・司会 興津 暁子

小学生の部『僕は上手にしゃべれない』

(稚野直弥著 ポプラ社)

吃音の中学1年生悠太が、姉や放送部の立花先輩、同級生で放送部の古部さんとの関わりを通じて成長していく物語。

小学生参加者から▽ずつと心に残る本。「練習しても吃音は治らない」という悠太のネガティブの感情が人間らしくてすごい。吃音だった古部さんが、自分と同じ吃音者がいたことがうれしくて悠太と友だちになりたがること

るも人間らしい▽弁論大会で悠太が「僕は言葉

が好きです」と言うところに感動した。ざわつく会場に向かって「静かにしろよ」と言う立花先輩は優しい—などの感想が出た。悠太が古部さんを拒絶したとき、なぜ古部さんは「練習したら私のように吃音は治るよ」と言わなかったのだろうと一人が疑問を出すと、▽僕だけ治らないと悠太が落ち込むと思ったのでは▽治らない僕を笑いものにしていたと誤解されるのを恐れたのではという見方が返ってきた。大人の一人が「自分が子どもだったら何倍も時間をかけてしゃべる子を面倒臭いと思うかもしれない」と感想を述べると、小学生から▽自分はその子と仲良くなったら、他の人も実はいいヤツと思うかもしれないので、まずはその子と仲良くなる▽その子のことをまずは分かっていたい。そしてその子のいいところをみんなに教えてあげる。そうしたら、みんなも仲良くできると思う—という答えがあり、大人一同、子どもたちの優しさに深く感動した。

大人からは▽初対面から吃音の悠太をすんなり受け入れる立花君が素晴らしい。アメリカ育ちが影響しているのか▽アメリカは多様性の国。障害のあるなしで人を判断しない▽講演

会でさくまゆみこさんがこの本とアメリカの『ペーパーボーイ』を比較し、どちらも吃音の子が主人公だが、捉え方がまったく違うと紹介していた。2冊を読み比べると『僕は』は吃音を治そう、隠そうとしているが、『ペーパーボーイ』は新聞配達をして、いろんな社会人と出会う設定。最初から吃音が個性の一つとして描かれている。ただ『僕は』も、最後は悠太が吃音を克服しようとする姿勢が変わって終わる▽姉が悠太を理解したいと質問する場面に感動した▽私もそこで大泣きした。見た目で障害が分からない人の辛さがこの本でよく分かったーなどの感想があり、小学生から『ペーパーボーイ』もぜひ読みたいという声が上がった。

中学生の部『トム・ソーヤーの冒険』

(マーク・トウェイン著 翻訳者・出版社多数)

この本を選んでくれたのは、以前『都会のトム&ソーヤー』(はやみねかおる著)を選書した中学生。「トムが友だちと島で生活する冒険が面白い。中学生になってから忙しくてやりたいことがなかなかできないが、いつかトムのような冒険をやってみたい」と感想を語った。別の中学生は「壁の漆喰塗りをしたくなるようにトムが友だちを仕向ける場面や、真夜中の墓場で



殺人事件を目撃する場面、幽霊屋敷でインジヤン・ジョーたちの会話を聞いている場面にハラハラした。大人にちよっかいを出して本物の事件に関わっていくところは「ぼくらシリーズ」(宗田理著)と似ている▽トムがダニと自分の抜けた歯を交換するのは意味がわからない。自分の葬式に出ようとするのはそこまでするかという感じーなどの感想がでた。

大人からは▽やんちゃ坊主のトムに対するおばさんの心の葛藤が切ない。「ニガー」など差別用語も多く時代を感じた▽読書会のおかげで子ども時代は途中で挫折した本を読み通すことができた。この本が読み継がれているのは、子どものやってみたいと思うことをトムたちがやっているから。個人の自主独立を評価するアメリカらしい物語▽印象に残っているのは洞窟の場面。限界状況のなかでもトムとベッキーは責め合わない。そこに感動した。トムは手に負えないところはあがるが、正義感や思いやりがある。こういう子、いいな。それに対して大人は口ばかりで情けない。宗教的に教条主義で、最後は幽霊屋敷に押し寄せ宝を探し回る▽続編の『ハックルベリー・フィンの冒険』を読んだうえで読み直すと、トムは中流家庭の子



であり、羽目は外すが、ブレイキのかけどころを本能的に知っている子だと思った。海賊ごっこするとき、ロビンフッドなど勇者伝そのままの遊び方をするとところにトムの性格があらわれている。『ハックルベリー』もいつか読んでほしい。南北戦争前のアメリカの社会状況が伝わってくる▽いちばん好きな場面は、トムが好きな子と結婚したいと言ったとき、ハックが「お前が結婚したら寂しくなるな」と言い、トムが「ならないさ。お前も俺んちで暮らせばいい」とサラリと言ったところ。

クリスマス・イブに開かれた読書会。子どもたちともに過ごした時間は、大人たちへの最高のプレゼントになった。(報告 横田恵美)

*詳細が研究会のHP「会員の広場」にあります

おはなしボランティア「びわの木」活動報告

お話会での出会いは私の宝

倉岡 寿雅子

「あつ、今日は、私が去年(体に異常を感じて)病院に行った日だ」。カレンダーを見て、ふと思いついた。あれから1年経ったんだ。あの日、病院から帰ると夫は「いろんなことをやりすぎ。いつも、忙しい忙しいと言っ

かけている。〇〇をやめろ、××をやめろ」と言うだけで、私を労わる言葉はなかった。私も、「その通りでございます」と言うしかなかった。でも、その時、一番残念に思ったのは「ああ、もうお話を子ども達に会えないのか」ということだった。

それから半年、少しずつ回復していった。友達からも「あら元気になったのね。でも無理しないでね」と言われる状態になった。担当医からも「普段通り生活していいですよ。でも車の運転はやめましょうね」と言われた。それで私は「元気になったよー。1人でバスと電車で来られたよー」と、研究会のみんなに報告できた。

でも、それから2回も救急車で運ばれた。担当医によると、1回目は、薬をきちんと飲まなかったから。2回目は「薬を変えてみましょう」と言われた。その後、少しずつお話会に参加できるといった。ある日のお話会の担当と、私の別の活動が重なった。どうしようかと迷っていた時、研究会のメンバーから「倉岡さんはいつ来るの?」ってAちゃんが言っていましたよ。中学部を卒業するから、次のお話会が最後になるって」。その言葉で迷いはなくなった。

Aちゃんに会いたい!



12月11日、私は熊本大学教育学部附属特別支援学校中学部のお話会でAちゃんに会えた。

その日のお話会のテーマの一つは「漢字」。明日は、『今年の漢字』が発表されますよ。どんな漢字になるのかニユースを見て下さいね」と言ってお話会は終わった。

私の「今年の漢字」は「会(会く)」である。



参加者募集

◇オンライン講座「グリム童話の魅力」

日時 2月25日(日) 10時~12時

講師 竹内識晃(東京家政学院大学非常勤講師・熊本子どもの本の研究会会員)



意見交換する時間もつくりません。講座の受講前と後とでは、グリム童話に対する見方が変わることを目標としています。なお、講座では資料を配布します。テキストも配布しますが、お手持ちの本でも結構です。

◇2月講座「幼い子と楽しむ絵本」

日時 2月21日(水) 10時~12時

場所 熊本市市民会館シアーズホーム夢ホール

0歳、1歳の赤ちゃん向けの絵本を楽しまます。赤ちゃん向けのおはなし会はいつも盛況です。おはなし会でおすすめの絵本や我が子が好きだった絵本について話しましょう。

報告 第5回研究会活動検討会

日時 12月17日(日) 10時~12時

場所 オンライン会合

参加者 4人

前回(10月8日)以降、会員が2名増加。24

年度の企画のアイデア、子どもと大人の読書会の今後の進め方、子どもが本を読む環境を作る方法などについて意見交換。

報告 「びわの木文庫」利用状況

11月18日(土) 子ども3人 大人2人

12月16日(土) 子ども1人 大人1人



2月、3月の講座・会合のご案内

○第6回研究会活動検討会（オンライン）

日時 2月11日（日） 10時～12時

○講座 幼い子と楽しむ本

日時 2月21日（水） 10時～12時

場所 熊本市市民会館シアーズホーム夢ホール

○第2回グリム童話の魅力（オンライン）

日時 2月25日（日） 10時～12時

○閉講講座

日時 3月13日（水） 10時～12時

場所 くまもと県民交流館パレア

○子どもと大人の読書会（オンライン）

日時 3月24日（日） 10時～12時

課題本 未定（ホームページに掲載します）

○おはなしボランティア「びわの木」

日時 2月1日（木） 11時～11時20分

場所 熊本県立図書館（0歳児）

★講座参加には事前申し込みが必要です。講座名、参加

者のお名前、連絡先を明記の上、メールでお申し込みく

ださい。場所、スケジュールについて、お越しになる前

に必ずホームページで確認ください。

メール kouza@kodomonohon.org

★オンライン会合への参加希望者は左記宛にご連絡願

います。メール zoom@kodomonohon.org



本はともだち！

昨年11月26日、渋谷のユーロライブで開催

された「骨なし灯籠」の試写会に行ってきました

た。昨年3月号（44号）の「私の一冊」

に寄稿していただいた木庭撫子さんの初監督

作品です。寄稿のお願いがメールのやり取りだ

けでしたので、お礼も兼ねて妻と一緒に伺いま

した。小雨の降る寒い日でしたが、開場前から

多くの人が集まり、本篇への期待が窺われまし

た。満面の笑顔で迎えてくださった木庭監督に

寄稿のお礼と映画完成のお祝いをお伝えして

から入場。開演時には満席になっていました。

山鹿市を舞台にした映画で、妻を亡くした

49歳の美術教師が、旅先の山鹿市で灯籠師見

習いをしながら生活していく中で生きる力を

取り戻していく話です。山鹿出身の俳優がバリ

バリの方言で演じるお節介な灯籠師見習い、道

で会えば見知らぬ人にも挨拶をする小学生達、

八千代座を含めた山鹿の文化と自然、そしてち

よつと不思議な人々との交流。1時間48分の

上演時間の間に、山鹿で1年間を過ごしていく

主人公の意識に共振し、最後、目頭が熱くなっ

てしまいました。終演後には拍手が鳴り響いて

いました。海外の評価も高く、昨年10月に開

催されたオランダのチネチッタ国際映画祭で

3位に入賞しています。

木庭監督は名古屋出身で、浅野有生子とし

て放送作家、脚本家として活躍してきた方です。

パートナーである木庭民夫さんの故郷である

山鹿市に移って来たことをきっかけに「骨なし

灯籠」のプロジェクトに脚本家として参加し、

その後図らずも自らが監督も務めることにな

ったとのこと。プロデューサーは民夫さんが務

めています。舞台となった山鹿市の紹介に留ま

らず、地方都市で生活することの魅力伝えて

くれる映画でもあり、より多くの方に観てほし

いと思いました。しかし、自主映画であるため

上映してくれる映画館を見つけることだけで

も大変とのこと。本映画に対する木庭監督の思

いが「骨なし灯籠」のホームページや寄附募集

サイトに紹介されていますので、是非ご訪問下

さい。（横田真）



■編集 金子・上林・横田 《イラスト》安田

特定非営利活動法人

熊本市子どもの本の研究会 発行

〒861-8029

熊本市東区西原1丁目15の24

